



高校教師としての二年間 ー自分の試練を振り返るー

高校地歴科教諭 栗原 佳

誓約書に署名・捺印をして高校教師となってから早くも丸二年が経過した。一年目には副担任として修学旅行の引率をし、運動部の主顧問にもなった。二年目で初めて担任となり、無事に一年生を二年生に進級させることができた。今ではこの二年間はあっという間に過ぎたと感じているが、数多くの試練があったこともまた事実である。そこで、今日までの二年間をこの場をお借りして振り返りたい。

最初の試練ー経験のない運動部

高校教師となって最初の試練は、運動部の主顧問になったことであった。恥ずかしながら私は生来運動が苦手で、学生時代にも運動部に所属した経験がない。勿論受け持っている部活の競技は専門知識も持ち合わせていなかった。そのため、最初の一か月は生徒の練習の流れをしっかりと観察したり、並行して練習メニューを組むための知識を本やネットで調べたりという感じであった。それでもよい練習メニューを組むのには時間がかかったが、生徒には随分とサポートをしてもらい今日に至っている。

部員のサポートに感謝

私が担当している部活は女子部であり、高校から競技を始めたものが大半を占める。中には余興という感覚で部活をしている者もいた。だが、中学校からの経験者がまとまって入ったことで部活全体のやる気を高めてくれ

た。常に目標を持って闘っている彼女たちの姿を見るのがいつも楽しみであると同時に、私をサポートしてくれる部員に対しては本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

担任クラスの交通事故

もう一つ試練を挙げるとするならば、担任としての一年間であろう。自分が担当したクラスはどういうわけか交通事故が多かった。勿論軽微なものが大半であったが、一時的に生徒が意識不明となり入院したというケースもあった。この時は本当にどうしてよいか分からなくなってしまった。朝、学校に着き学年主任から自分のクラスの生徒の意識がないと言われたのだから。幸い私が病院に駆けつけた頃にその生徒は意識を取り戻し、今では無事に学校生活を送っている。



この時に感じたのは、生徒は親や友人に心底から愛される存在なのだということだ。病院に行く前に私にすり寄ってきた生徒、自分の子どもの無事を病室の外で祈る親。あらゆる人がその生徒の事故を悲しみ、無事を喜んだ。子どもを愛さない親、友人を愛さない友人はいない、私はこの出来事で改めて感じた

のだった。だから私も教師として自分の生徒のことを心から大事に思って接しなければならないと思っている。

特別指導

だがこの二年間の中で最大の試練は、自分のクラスから特別指導の生徒を三名出してしまったことである。特別指導の経験などは勿論なく途方にくれるばかりであったが、学年団をはじめ多くの先生方が私を気遣って下さった。そのおかげで三名とも無事に進級をすることができた。この経験からは、どんなことがあっても生徒が良い方向に向かうように諦めないで接しなければならないことを学んだ。同時に何か困っている先生方がいたら、これからは自分が進んで援助をしようと考えようになった。

授業でのやりがいと喜び

とはいっても大変なことばかりではなかった。私の担当科目は地歴であるが、一年目は地理と日本史、二年目は地理を担当させていただいた。日本史では、道德教育と関連させて日本とトルコ、スリランカの関係についての授業をしたり、金融教育の公開授業を行ったりした。特に日本とスリランカとの関係を扱った授業では、あまり日本史が得意でない生徒が後で「泣いた」と言ってきてくれた。その時に地歴の教員になることができて本当によかったと感じることができた。

二年目の地理では一年の全クラスを担当した。勿論地理専門の先生方の授業には到底及ばない。ただ世界の国々に関することは生徒にとって有意義な実践ができたかと思う。その実践は、世界のガイドブックをもとに生徒に画用紙一枚で観光案内をつくらせるというものである。実業高校なので他人に対して魅力をアピールすることを培わせたかったのだが、生徒は想像したよりも本気で発表してく

れた。何よりも地理が苦手な生徒が例えば絵を描くというような場面で、能力を発揮できる場面をつくることができたのがよかった。

恩師の後押し

この二年間は多くの先生方に支えていただいたのだが、私にとって幸運だったのは恩師と一緒に仕事ができたとということである。いつもの確なご指導をしていただくだけでなく、私の考える授業を後押しして下さった。まだまだ高校生時代からの恩をお返しできたとは思っていないので、教師としてもっと色々なことに挑戦していきたいと思う。

「この経験が生きるよ」

私の二年間を振り返ると、どちらかといえば大変なことの方が多かったというのが正直なところである。しかし先生方に言われたのは、「絶対にこの経験が生きるよ」という言葉であった。これからも多くの試練が待ち受けているだろうが、逃げずに立ち向かいたい。

ひとまず今年度の目標は修学旅行を成功させることである。そして来年度には受け持ちの生徒を無事に卒業させて、卒業式で泣くというのが自分の目標である。

